

# 巻頭 熊谷史上最大の1イヤー キックオフ!!

「自分が出来ない、と思うのとはなく、自分しか出来ない、と思うそれこそがラグビーだ、と思う。」



いよいよ迎えたワールドカップイヤー。16年3月、17年11月に続くNAOZANE3度目の巻頭特集は、立正大・堀越正巳監督はじめラグビータウンの人々の声を集めた。

## 「ミスター熊谷ラグビー」の30年ロマンが実現に

「20年前熊谷に帰って来た時には、夢にも思っていなかった」50歳を迎えたばかりの堀越正巳立正大監督は、「2019」をこう語った。

熊谷工業高で主将・スクラムハーフとして1987年に全国準優勝。早大、神戸製鋼、日本代表で活躍したキャリアは「ミスター熊谷ラグビー」といっていい。堀越さんがワールドカップに初出場して熊谷市が「ラグビータウン」を掲げた91年、当時日本全体のラグビー熱もピークに達していた\*1。「僕らの4年後、全国初優勝チームの県大会決勝が最後の荒川河川敷開催でしたね。その91年に国内では花園とここだけの3面のラグビー場が完成。当初「じゅうたんの上」といわれたピッチもスタジアムでしたが、少しずつ傷みが出てきていました」

99年に現役を引退して故郷熊谷の立正大監督に就任。2004年のリーグ戦1部昇格など強化に努めつつ09年に開催が決定\*2したワールドカップ日本大会に向け、「熊谷ラグビーのまちづくり」に関わっていく。そのひとつが14年設立の女子7

人制クラブチームARUKAS KUMAGAYA。勤務先としての地元企業など産学が連携したNPO法人で、小中高のアカデミーを備える従来なかったスタイルのクラブだ。

「イギリスで読んだ、ラグビーを強くするには選手の母親となる女性に理解されなければという記事が印象に残っていて、オリンピックの正式種目になって動き始めました。すぐでなくても20年後、30年後にきっと実を結ぶと思います」そして15年、ワールドカップ熊谷開催が決まる。

## 「ここで何かしなければ一生後悔する」ラグビーから起業に

堀越さんの熊谷東中7年後輩に、Warai兄弟社代表新井孝一さんがいる。中学は野球部だったのも堀越さんと同じ。新井さんは深谷高でラグビーを始め、スタンドオフとして活躍した。「全国大会には行けなかったけど、県内では強豪チーム。そんな中、日本代表でプレー



すっかり定着したタグラグビー。初めての人も体力に関係なく楽しめる

できるわけじゃない僕でもできるのはラグビーの普及だと思ったんです」高校卒業後に参加したクラブチーム、現在の「RFC熊谷」でラグビーを続ける傍らで、タックルがなく子どもから高齢者まで楽しめる「タグラグビー」\*3に出会いその魅力の虜になる。小学校の体育授業でのタグラグビー指導や、親子チームワーク教室を開催するほか、大会やイベントなどでも積極的に活動している。そして新井さんは、この普及活動を起業に結びつけた。「高校時代、1、2年生との混成チームで勝てるわけないと流したら、さびしいことで有名な恩師から『新井このやろう！このメンバーでどうしたら勝てるかを考えるんだよ』と怒られました。それがヒントです」

歯科医のサポート会社に勤務していた新井さんは、ラグビーのパスのように仕事をつなぐクリニック内のチームワーク研修にタグラグビー活用を提案。対象を歯科医以外にも広げ16年に株式会社を設立した。

独立後は熊谷市の観光ワークショップ「Design Take」への参加など、元スタンドオフらしい自由なワークメイカーぶりを発揮。熊谷市職員研修にも採用されるなど、少しずつ広がっている。「子どもの頃、オールブラックスを知ったワールドカップの熊谷開催。ここで何かしなければ一生後悔すると思っただけです」

## ボランティア、参加国歌や料理…スタジアム外まちでも広がる

こうしたビッグイベントでは、ボランティアの存在がクローズアップされる。ワールドカップの公式ボランティアプログラム「TEAM NO-SIDE」には全国で3



鈴木さんの「絵手紙年賀状」。「熊谷の河童」の紙芝居もレポートリーダ

「ワールドカップの体験を、東京オリンピック・パラリンピックにも活かしたいですね。大学1年の時に大学のすぐ近くで行われた東京五輪に、50年経ってボランティアで参加したいんです」

万8000人の応募者があり、面接などの選考会が行われた。熊谷に移って6年、国際交流協会、健康ウォーキングクラブ、マイ紙芝居・紬の会など幅広く活動する鈴木國昭さんは、ノーサイドにエントリー。県協会のボランティア「Band」のメンバーでもある。「車の運転、駐車場、道案内などボランティアの内容はさまざま。わたしは本部スタッフを希望しています。Bandに参加してうれしいのは、全国から集ってくる同じ意志を持った仲間たちとの交流です。ね。北陸から新幹線で来る人もいます。北陸から新幹線で来る人もいます。年齢、男女比ですか？中高生のお子さんが多いママたちを中心に、わたしの感覚では女性の方が多いくらいですね」

## 「自分しか出来ないこと」を「ノーサイド」で

地元企業にとっても、大きなアピールのチャンス。関連商品も続々出てきている。

お菓子では、まず梅林堂の人気商品「生サブレ」や「わか」ワールドカップ仕様パッケージ。同店は「埼玉博通り店」をいち早く「ラグビーロード店」と改めている。「ラガーマン」「トリプルトライ」といった定番がある花扇は、生菓子「熊谷でTRY」。沢田本店もボール型の「くまがやマドレーヌ」を発売開始している。

これまでほとんどのゲームに出店してきた市内唯一の酒造権田酒造の権田幸子さんはSNSで問題提起した。



1. Youtube動画は「ジョージア国歌 熊谷高校」検索で閲覧できる  
2. 沢田本店のラグビーボール型「くまがやマドレーヌ」

「ひとことではなく、熊谷全体で行政も個人も関係なく、一体感をもってあたるべきではないのかな。手伝いたいんだけどどうすればいいの、ってよくきかれるんです。どの窓口にきいても、パスしあっているような気がするんですよ。せっかくなので大きなイベントです。私は傍観者でいる選択はしたくありません」

「自分が出来ないって思うのではなく、自分しか出来ない事」って思う。それがラグビーだと思ふ(富士見中1年 根岸勇気さん)

2019年熊谷は、キックオフのホイッスルが鳴った。どんなゲームになるか、市民一人ひとりにかかっている。さあ、楽しもう。

\*1 戦後10年ごとにスポーツ新聞の1面見出しを調べたある論文では、ラグビーは1990年がもっとも多くサッカーをしのいでいた

\*2 堀越さんのインタビューでは日本開催決定に尽力した人々として、熊谷高卒で同じSSHの故・宿澤広朗代表監督、神戸製鋼でもともにプレーした故・平尾誠二選手、イラブに殉職した早大ラグビー部OB奥克彦外交官らの名があがった

\*3 本誌18年3月号で「第1回歩きでタグラグビー大会」を特集。市民協働「熊谷の力」ではARUKAS KUMAGAYA選手が市内小学校での授業を展開している